

農学国際特論 I 冬学期レポート

～パナマにおける調査報告～

農学国際専攻 修士1年

学籍番号 39-146223

大阪 まるみ

1.調査概要

渡航目的:修士論文執筆のためのフィールドワーク(第一回)

滞在国:パナマ共和国

調査期間:2014年9月27日～2014年12月18日(82日間)

研究テーマ:農村地域における民芸品植物資源利用の実態ーパナマの事例研究より

調査内容:パナマ共和国コクレ県山村部帽子生産者及び住民への聞き取り調査、帽子生産者宅での参与観察

2.パナマについて



パナマの国旗

《基本情報》

面積:75416 km²

人口:3454000人

首都:パナマ市

政体:共和制

公用語:スペイン語

宗教:ローマカトリック 85%、プロテスタント 13%、その他(仏教、ヒンドゥー教、ユダヤ教、バハイ教など) 2%。

識字率:91.9%

通貨:バルボア、為替レート:1バルボア=1米ドル

在留邦人数：308人

在日パナマ人数：74人

国民総所得(GNI)

経済成長率：8.4%(2013年会計検査院)

主要貿易品：輸出：金、バナナ、エビ類、鉄くず、パイナップル、原料糖

輸入：鉱山品、電気製品・部品、輸送機器、化学製品、食料品

主要貿易相手国：輸出：米国、カナダ、コスタリカ、オランダ、スウェーデン、中国、台湾

輸入：米国、中国、コスタリカ、メキシコ、コロンビア、韓国、スペイン、日本

パナマの位置：

略史：

1501年→スペイン人バスティーダ、パナマ地峡発見

1821年→大コロンビアの一州としてスペインより独立

1903年→コロンビアより分離独立

1914年→米国、パナマ運河完成

1968年→トリホス将軍、クーデターにより実権掌握

1678年→ロヨ大統領就任、民政移管

1983年→ノリエガ将軍が国軍最高司令官に就任

1989年→米国の軍事侵攻、ノリエガ将軍逮捕、エンダラ政権発足

1999年→モスコソ大統領就任、パナマ運河返還、米軍完全撤退

2004年→トリホス大統領就任

2009年→マルティネリ大統領就任

2014年→バレーラ大統領就任

3.パナマ帽とは

パナマ帽というと、白地に黒いリボンが巻いてあるもの(写真1参照)を思い浮かべる人がほとんどであると思うが、ここで言うパナマ帽(写真2参照)は、世界的に有名なパナマハットとは別の物である。日本でも流通しているパナマハットはエクアドルが起源の民芸品である。ここでは、「パナマ人の伝統的民芸品」である帽子をパナマ帽と呼ぶこととする。

パナマ帽は、パナマ人のシンボルともいえるもので、伝統的な衣装として、街への外出や、農作業の時などに着用されている。

着用する帽子の種類は、用途によってもかわってくるが、多くの人が着用しているのを、街の商店街、農村部の畑、お祭りの会場などいたるところで見ることができる(写真3参照)。

パナマ帽は、今回の調査地であるコクレ県北部においては農村部の住民にとって、貴重な現金収入源であり農作業や家事の合間の仕事とされているが、近年原料植物が減少しており、その問題に対応するべくパナマ環境庁や、商工省などによって、育苗プロジェクト

や、生産者支援プロジェクトなどが小規模に行われている。

今回の調査は、複数の村、町において、参与観察、聞き取り調査をすることによって、当該地域での原料調達から帽子づくり、販売までの全体像を把握すること、問題発見をすることを目標に行った。

次項からは、どのような経緯で村々を移動していったのかを説明する。



(写真 1.パナマハット(エクアドルの民芸品)) (写真 2.パナマ帽(パナマの民芸品))



(写真 3.パナマ帽を着用する人)

4.訪問の経緯

今回調査に訪れた地域は、パナマ共和国、コクレ県の1つの市、8つの村である。滞在期間は雨季¹まったただ中で、雨季には車が入れない、もしくは同行者が見つからないなどの理由で、本当は行きたかったが、訪問を断念した村もあった。

まず、筆者が、当初の予定²を大幅に変更して、3ヶ月の間どのように、どのような動機で村から村へ移動していったのかを簡単に説明したい。

- ① 市場調査：まず、都市部を中心に流通しているパナマ帽の種類、価格、パナマ帽の他にどのような民芸品があるか、これらの民芸品がどこで生産されているのかなどを、公営民芸品市場、パナマ商工省の運営する民芸品店、民芸品店、露店、などで聞き取りを行った。

公営民芸品市場は、ペノノメ市が運営している市場であり、5件の民芸品店が場所代を市に支払い営業している。パナマ商工省の運営する民芸品店は、パナマ商工省の民芸品生産者ライセンスを持った生産者の商品を置く直売所で、店員はパナマ商工省の人間であり、売上は記録して後日生産者が来た時に渡すしくみである。ただし、わざわざ足を運ばなければならないこと、いつ売れるかわからない不確かさなどから、嫌厭する生産者も多く見られた。

- ② 参与観察：筆者は、エルコペ村の民芸品生産者宅に滞在し、パナマ帽作りの手伝い、修行を通して、民芸品生産者が、どのように原料植物の採取、栽培を行い、パナマ帽が生産、販売されているのかを教えてもらった。

- ③ 原料植物の流通ルート探索：パナマ帽の黒い模様部分に使うアストロカリウム・スタンレイアヌム (*Astrocaryum standleyanum* L.H.Baily)³は、エルコペ村では採れず、近隣のマチュカ村やピエドラゴルダ村で購入していると聞き、原料植物の流通ルートを調べたいと思い、チョンタの加工を行っている村を目当てにしながらかつ6つの村(図1.参照)を訪問した。

以下①-③の調査項目ごとに訪れた調査地について調べたことを記述する。

¹ パナマでは、5月～12月が雨季、1月～4月までが乾季である。

² 前回レジュメ参照。

³ 以後チョンタと表記する。

5.調査地概要



図 1.訪問地の位置関係(筆者作成)

表 1.訪問地の基本情報(筆者作成)

	訪問地	交通	人口	滞在日数
①-A)	ペノメ市	首都から車で約3時間	5442人	12
①-B)	ラピンターダ村	ペノメ市から車で30分	950人	4
②	エルコペ村	ペノメ市から車で約1時間	254人	19
③-A)	マチュカ村	ペノメ市から車で約1時間20分 エルコペ村から車で40分	151人	3
③-B)	ピエドラゴルダ村	ペノメ市から車で約1時間 エルコペ村からは約1時間20分	109人	2
③-C)	ソフレ村	ペノメ市から車で1時間強	126人	2
③-D)	サンペドロ村	ペノメ市から車で約2時間	126人	3
③-E)	サンミゲルセントロ村	ペノメ市から車で約2時間半 サンペドロ村から3～40分奥	161人	6
③-F)	バキージャ村	ペノメ市から車で約2時間半	161人	6

今回調査に訪れた地域は、パナマ共和国、コクレ県の1つの市、8つの村である。滞在期間は雨季⁴ただ中で、雨季には車が入れない、もしくは同行者が見つからないなどの理由で、本当は行きたかったが、訪問を断念した村もあった。

まず、筆者が、当初の予定⁵を大幅に変更して、3ヶ月の間どのように、どのような動機

⁴ パナマでは、5月～12月が雨季、1月～4月までが乾季である。

⁵ 前回レジュメ参照。

で村から村へ移動していったのかを簡単に説明したい。

- ① 市場調査：まず、都市部を中心に流通しているパナマ帽の種類、価格、パナマ帽の他にどのような民芸品があるか、これらの民芸品がどこで生産されているのかなどを、公営民芸品市場、パナマ商工省の運営する民芸品店、民芸品店、露店、などで聞き取りを行った。

公営民芸品市場は、ペノノメ市が運営している市場であり、5件の民芸品店が場所代を市に支払い営業している。パナマ商工省の運営する民芸品店は、パナマ商工省の民芸品生産者ライセンスを持った生産者の商品を置く直売所で、店員はパナマ商工省の人間であり、売上は記録して後日生産者が来た時に渡すしくみである。ただし、わざわざ足を運ばなければならないこと、いつ売れるかわからない不確かさなどから、嫌厭する生産者も多く見られた。

- ② 参与観察：筆者は、エルコペ村の民芸品生産者宅に滞在し、パナマ帽作りの手伝い、修行を通して、民芸品生産者が、どのように原料植物の採取、栽培を行い、パナマ帽が生産、販売されているのかを教えてもらった。

- ③ 原料植物の流通ルート探索：パナマ帽の黒い模様部分に使うアストロカリウム・スタンドレイアヌム(*Astrocaryum standleyanum* L.H.Baily)⁶は、エルコペ村では採れず、近隣のマチュカ村やピエドラゴルダ村で購入していると聞き、原料植物の流通ルートを調べたいと思い、チョンタの加工を行っている村を目当てにしながらかつ6つの村(図1.参照)を訪問した。

以下①-③の調査項目ごとに訪れた調査地について調べたことを記述する。

- ① 市場調査

ペノノメ市とラピンターダ村で、1)民芸品の種類、2)生産地、3)買い取り価格、4)販売価格、を意識してインタビューを行った。

A) ペノノメ(Penonomé)市

首都から車で約3時間、人口5442人、コクレ県の県都であり、市役所や各省庁の事務所などの行政施設、公営の市場、大規模なスーパー、雑貨を売る店などが立ち並ぶ商店街もある。

コクレ県北部の村々で生産された多種多様な民芸品は、ペノノメ市の公営民芸品市場、露店、パナマ商工省(MICD)⁷が運営している民芸品店、など街のいたるところで見

⁶ 以後チョンタと表記する。

⁷ Ministerio de Comercio e Industrias。以降、本レジュメでは、パナマ商工省と表記する。民芸品生産者を支援するプロジェクトを行っている。生産者グループに対して、原料植物の育苗するための技術支援や物的支援、セミナーの開催、生産者の交流会、直販できるイベントへの招待、生産者ライセンスの発行などを行っている。生産者ライセンスとは、

られる。ここでは、民芸品店の店主や店員、パナマ商工省関係者にインタビューを行った。

1)と2)については、大体把握することができ、2)については、今回の調査地も含まれていた。3)と4)に関しては、人を見て価格を決めたり交渉したりすること、買い取りの量や、時期によって価格が変わることなどから、はっきりとした答えを聞き出すことはできず、うまく把握できなかった。

特筆すべきこととしては、当初筆者が思っていたのとは違い、小売り商人や仲買人が村に買い付けに行くということは比較的少なく、生産者、もしくは村内の生産者兼仲買人が直接ペノメ市の民芸品店に持ち込むことが多いということである。

B) ラピンターダ(La Pintada)村

ペノメ市から車で30分程度、人口950人のパナマ帽の生産地として有名な村である。ラピンターダ村は、ラピンターダ地方行政区に含まれており、この地域全体でパナマ帽や民芸品の生産が盛んである。パナマ帽の博物館や民芸品店、複数のパナマ帽の生産者グループがある。また、月末の最終日曜日には、民芸品や農作物の日曜市が開かれ、周辺の村々の生産者も直販するために集まってくる。

また、アクセスがよいこと、商品の品ぞろえがよいこと、ほどよいパナマの田舎情緒を味わえることなどから、近隣のビーチリゾートに来る外国人観光客の日帰りツアーの立ち寄りがある。

ここでは、村の中心部にある民芸品店など3店舗で、店主、もしくは店員に聞き取りを行った。1)については把握できたが、2)、3)については、「村内の生産者グループから購入している」というのは納得できるが、大量のパナマ帽があるにも関わらず、「自分が全て作った」などと言う店主もいて、あまり信憑性が高い情報と思えなかった。周辺の村から購入している事実を話す人は訪問した中ではいなかった。4)については、やはり客によって価格を変えているようで、うまく把握できなかった。

商品は、パナマ帽が中心であるが、パナマソウ(*Carludovica palmata* Ruiz & Pav.)⁸を使った、小銭入れや扇子、動物モチーフの飾りなどが見られた。

② 弟子として帽子づくりに参加した参与観察

エルコペ(El Copé)村

エルコペ村は、ペノメ市から車で約1時間、人口254人の村である。近くには、オ

パナマ商工省が発行する民芸品生産者であることを証明するライセンスで、取得すると、商工省のセミナーに参加でき、商工省が運営するペノメ市の民芸品店に商品を置くことができる。

⁸ 以降、本レジュメでは、パナマソウと表記する。パナマ帽の原料植物であるが、小銭入れや、飾り、扇子など様々な民芸品も作られる。

マルトリホ国立公園⁹がある。

エルコペ村のパペリージョ集落(Papelillo)に住む、パイさん(男性、61歳)宅に滞在し、パナマ帽づくりの弟子として参与観察を行い、また、パペリージョを含めた、隣接するふたつの集落、(ホーボ(Jobo)、バリゴン(Barrigon))のパナマ帽生産者を中心にインタビューを行った。

パイさんは、妻のトナさん(女性、51歳)と二人暮らしであり、また、メンバー約20人(大人12人、子供8人)のエルコペ村の民芸品生産者グループのリーダーであり、コクレ県内の民芸品生産者の中でも有名な生産者である。8歳のころからパナマ帽づくりをはじめ、農業の傍ら、パナマ帽に限らず、色々な民芸品を練習し、時には、創意工夫して新しい作品をつくり出したりしている。小学校までしか出ておらず、コンプレックスを持っているが、それを払しょくするために40歳を過ぎてから植林技師の資格を取った。パナマ商工省や環境庁のセミナーにも頻繁に参加し、植物や化学、肥料づくりや染色の技術などを貪欲に学び、現在では、両省庁の民芸品生産者を対象としたセミナーや大学の特別セミナーなどに講師として招待されたり、原料植物の育苗プロジェクト、生産者支援プロジェクトなどに参加している。

参与観察するにあたって、練習をさせてもらえるだけのパナマ帽づくりに使用する原材料植物が豊富にあることが必要であったため、両省庁の担当者から推薦のあったパイさんの家に滞在することになった。

参与観察をはじめた日の翌々日には地方都市の比較的大きな祭りへの参加をひかえており、特に帽子づくりに忙しく、筆者も客人としてではなく労働力として、朝から晩まで帽子づくりに関わることができた。パイさんは、朝の6時ごろから畑に出て、キャッサバや豆などの作物の世話をし、仲買人でもあるので、商品を近隣の生産者宅を回ってパナマ帽を買い集めてくる。10時ごろに遅い朝食を食べてからは、たまに畑に出ていくものの、ほとんどの時間をパナマ帽づくりに費やしており、それは深夜1時まで続く。これは、祭り参加準備のため特別忙しいのかと思っていたが、寝る時間が深夜12時になっただけで祭り後も特に暇にはならず、皆が寝た後にフィールドノートを書き起こさないといけない筆者は、ずっと睡眠不足だった。

祭りでは、直販するためのブースに招待したパナマ商工省担当者が、送り迎えと宿泊所の手配を約束していたにもかかわらず約束を守らず、連れていかれたきり、3泊野宿をしながら店番をすることになった。最終日にも、結局連絡がつかず、迎えにも来ないとわかった時には、車がないと持って帰れない大量の在庫を抱えて途方に暮れた。祭りの期間中売上金を無頓着に使って常に酒に酔っていたパイさんは、このトラブルを見ていた女性にタダ同然で在庫を売ってしまい、後悔して泣き出すという混乱状態に陥った。結局、筆者の元配属先の知り合いに頼んで、商品を取り戻してもらい、エルコペ村まで

⁹ 1986年に設立された国立公園。パナマ環境庁(ANAM)が管理しており、許可なく立ち入れない。周辺地域の植林プロジェクトや民芸品生産者グループの支援も行っている。

送ってもらうことになったが、その後 2、3 日プイさんは落ち込んでほとんど口をきかなかった。そんなトラブルがあって、プイさんは、こんなことはもう 3 回目だとパナマ商工省の担当者に腹をたてていたが、それでも事を構える気はないとのことだった。

ここで、学んだ帽子づくりの内容については、6.パナマ帽作りについてで触れる。

③ 原料植物の入手ルート

A) マチュカ(Machuca)村

基本情報：マチュカ村は、ペノノメ市から車で約 1 時間 20 分、人口 151 人、エルコペ村からは、40 分程度の村である。パナマ帽を主に生産しており、その他の民芸品はあまりみられなかった。村の家庭の 9 割以上がパナマ帽生産を行っており、2 つの生産者グループがあり、パナマ商工省や環境庁¹⁰、過去には NGO などの支援も得て活発に活動している。

たとえグループに所属していても、各家庭で独立してパナマ帽作りの全ての作業工程を終わらせる他村のグループとは違い、このグループでは、行程による分業を他のメンバーと行っており、省庁からの大量発注にも効率的に対応している。

グループの供託金の持ち逃げや使い込みなどもなく健全に運営されている。

付き合いのある、村内外の仲買人、不定期ではあるが省庁にも販売している。

チョンタについて：エルコペ村のプイさんが、この村か以下のピエドラゴルダ村にパナマ帽作りに必要なチョンタを仕入れに行くと聞き訪問した。

生産者グループのリーダーにチョンタの木のあるところまで案内をお願いした。

チョンタの木は、村の中心部から歩いて一時間強の畑で一本のみ確認できたが、村内にはあまり見られないとのこと。たとえ木があったとしても、昔からあまり採取、加工して利用する習慣はなく、更に北に 4 時間ほど歩いた山奥から来る村人から購入しているとのこと。自身で使用する分以外は、近所や他の村からチョンタを買いに来る民芸品生産者に転売している。

B) ピエドラゴルダ(Piedra Gorda)村

基本情報：ピエドラゴルダ村は、マチュカ村の隣村であり、ペノノメ市から車で約 1 時間、エルコペ村からは約 1 時間 20 分、人口 109 人の村である。マチュカ村ほどではないが、パナマ帽生産者が多く、近隣の村にパナマソウの繊維を販売することもある。主にパナマ帽を生産しており、調査期間中、あまりその他の民芸品は見られなかった。

チョンタについて：この村でも、マチュカ村と同様のルートで入手している生産者がい

¹⁰筆者の元配属先機関。同じく原料植物の育苗、植林などの技術支援、セミナーへの招待、イベントへの招待を行っている。

て、近隣の生産者に販売していた。また、ペノノメ市の公営民芸品市場でチョンタのみ購入している生産者もいた。チョンタの木に関して実物をこの村で確認することはできなかったが、ここでも昔から購入するのが主流であった。

C) ソフレ(Sofré)村

基本情報：ソフレ村は、ペノノメ市から車で1時間強、人口126人の村であり、多くの住民がパナマ帽を含めた民芸品づくりを行っている。この村の生産者は、商品を仲買人に販売したり、ペノノメ市に売りに行くよりも、この村から歩いて3時間程度の観光地であるエルバジェ(El Valle)の週末市で定期的に販売することが多い。

民芸品グループのリーダー宅では、パナマ帽も生産しているが、動物などをかたどった、パナマ帽と同じ原料植物で編んだ飾りや、アクセサリ、ナシミアントと呼ばれるキリスト誕生をモチーフにしたクリスマスの飾りなど多種多様な民芸品を主に作っている。

また、別の民芸品生産者宅では、パナマ帽やパナマソウを使った民芸品は作っておらず、ヒョウタンノキ(*Crescentia cujete* L.)¹¹の実を使った飾りや、動植物が絵付けされた飾り用の木の皿を生産していた。

チョンタについて：元々この辺りにはなく、バキージャ村やチギリ村から買っていた。現在も両村の知り合いから購入している。

D) サンペドロ(San Pedro)村

基本情報：ペノノメ市から車で約2時間、人口126人の村。藤澤さんの調査地。ここにもパナマ帽作りをしている人がいると教えてもらい、訪問。時間の関係で2人の生産者にしかインタビューできなかったが、他の訪問した地域ではなかなか見られなかった、目の細かいパナマ帽(Sombrero fino)の作業工程を見ることができた。また、エルコペ村では使われていないコンパスと呼ばれる、パナマソウの繊維を一定の幅に割くための道具¹²を知ることができた。

チョンタについて：インタビューした生産者のうちの一人が、バキージャ村出身の女性で、村の中心部で小さな店を営んでいる。里帰りする際、もしくは知り合いに頼んで、バキージャ村の親戚、知り合いから購入している。また、それを店で販売している。

E) サンミゲルセントロ村(San Miguel Centro)

基本情報：ペノノメ市から車で約2時間半、サンペドロ村から3～40分奥の人口161

¹¹補足資料参照。

¹²補足資料参照。

人の村である。

ポウルセニア・アルマタ(*Poulsenia armata* (Miq.) Standl.)¹³、通称ククアと呼ばれる木の皮を加工して、儀式やお祭りに使用される衣装や民芸品を作っており、財布などの小物や儀式に登場するククアの衣装を着た鬼の人形などの民芸品を製作している。

枯渇しつつあるククアの保全活動や、儀式の出張プレゼンなどを他地域で行っており、次世代に受け継いでいけるように子供たちと一緒に活動している。

パナマ帽の生産者が非常に少なかった。この村では、少なくとも販売目的でのパナマ帽生産はほとんど行われていない。

チョンタについて：ペノノメ市の公営民芸品市場で販売していたチョンタの繊維の入手先を店主に尋ねたら、名前はわからないがこの村の人であるとの証言から、チョンタ生産者を探すために訪問した。チョンタの木自体はあったが、現在はもう採取することはほとんどなく、必要な時はサンペドロ村の店で購入するか、バキージャ村の知り合いに頼むことが多いとのことだった。

F) バキージャ村(Vaquilla)

基本情報：ペノノメ市から車で約2時間半、人口161人の村。チョンタを加工、近隣の村に供給している村である。他の原料植物も自給しており、余剰分は他地域に販売している。原料植物の加工、販売のみを行う家もあった。

パナマ帽、民芸品生産者も多く、パナマ帽以外に小銭入れやバッグ、動物をモチーフにした飾りなどが見られた。パナマ帽生産者グループも存在するが、供託金の使い込み、運営方針などへの不満、支援者の撤退などがあって現在は実質的な活動はしていない。

パナマ帽やその他民芸品は、販売する場合は主に村内の生産者兼仲買人に販売している。以前は外部から多く買い付けに来ていたが、価格が低く納得できず、売る人が少なくなった。

チョンタについて：サンミゲルセントロ村とサンペドロ村、ソフレ村で、バキージャ村には間違いなくチョンタの繊維を生産して販売している家庭がいくつもあり、相当量のチョンタを供給しているとの証言を受けて訪問した。

実際訪問してみると、畑だけでなく、町の中心部、生産者宅の庭にもチョンタがあり、インタビューしたパナマ帽生産者のほとんどが複数所有しており、中には合計20本所有している人もいた。

インタビューした8人のチョンタ所有者の全員が、手入れを行っており、うち3人は、苗を自身の畑に継続的に植えており、経験上チョンタの生育に適した土地を選んで植えているという人もいた。

¹³ 以降、ククアと表記する。

6. パナマ帽作りについて

筆者が、エルコペ村のプイさんのもとで学んだ内容を、その後の別の村の民芸品生産者へのインタビューで補完した。

6-1 原料植物

パナマ帽は、基調となる部分と模様部分、縫い合わせるための糸の部分の3つに分かれ、それぞれ別の植物でできている。

地域や生産者によって基調部分、模様部分、糸の部分に使う原料植物の組み合わせが違う場合がみられた。また、エルコペ村、ピエドラゴルダ村、マチュカ村では、糸の部分には、主にカブージャが使われているが、サンペドロ村、サンミゲルセントロ村、バキージャ村では、ピータが使われており、ピータを使用する習慣のあるソフレ村の民芸品生産者のマリアデロスアンヘレスさん(女性、78歳)は、育苗プロジェクトで植えたカブージャ¹⁴がたくさんあるにも関わらず、繊維に加工する方法がわからない、いつ収穫すべきかわからないとして半年から1年で収穫できるカブージャをまだ一度も収穫しておらず、少なくとも4年は放置している。

表 3. パナマ帽の原料植物(筆者作成)

基調	模様	糸
<ul style="list-style-type: none">・ パナマソウ (<i>Carludovica palmata</i> Ruiz & Pav.)・ フンコ (<i>Scirpus lacustris</i>)・ カーニャブランカ (<i>Cynerium sagittatum</i> (Aubl.) P. Beauv.)	<ul style="list-style-type: none">・ チョンタ (<i>Astrocaryum standleyanum</i> L.H.Baily)・ フンコ (<i>Scirpus lacustris</i>)	<ul style="list-style-type: none">・ ピータ (<i>Aechmea magdalenae</i> (André) André ex Baker)・ カブージャ (<i>Furcraea cabuya</i> Trel.)

多くの生産者たちは、これらの原料植物が減少し、入手が難しくなったと感じており、特にチョンタについてはその傾向が著しい。模様や糸に使う植物について、地域によって違うものを利用していることがわかった。

6-2 パナマ帽の種類

パナマ帽の種類は、模様、用途、段の数(目の細かさ)、材料などによって分類することができる。その模様によって、それぞれパナマ帽に名前があり、パナマ帽の用途によって、農作業用パナマ帽、お出かけ用、フォーマルなパナマ帽などに分かれる。それぞれの境界は人によっても違うが、おおそ段の数(パナマ帽の目の細かさ)が基準になっている。

¹⁴ この育苗プロジェクトは、パナマ商工省のもので、担当者から依頼を受けたエルコペ村のプイさんが苗を用意し、講師として訪れ植えたもの。

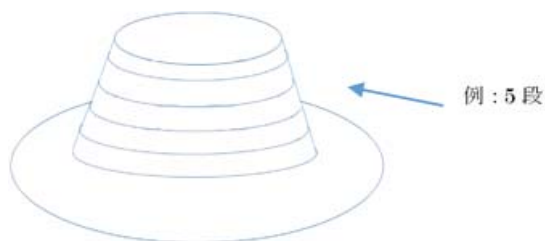


図 2.パナマ帽の段(筆者作成)

6-3.パナマ帽のつくり方

パナマ帽のつくり方には下記の二種類がある。

6-3-1.クリネハ

クリネハと呼ばれるテープ状のパーツを繊維で編む行程と、それを縫い合わせてパナマ帽の形にしたてていく行程の二つに分かれる。縫う工程では、まずはじめに渦状に頭頂部分を縫い、その後サイド、つばの部分と、上から下に帽子の形に縫い合わせていく。現在は、男女の別なく作られているが、昔は主に女性が作っていたパナマ帽である。

6-3-2.トルシージョ

クリネハのように、編む行程と縫う行程に分かれておらず、編みの行程だけである。

基調となる原材料植物は、パナマソウのみ、模様部分はチョンタのみ、縫う工程がないので糸になる原料植物は使用しない。

主に男性が生産する仕事用、土産物用のパナマ帽である。

模様の部分は市販の色のついた糸などが使われることもよくあり、土産物用のトルシージョには「Panamá」という文字が入っているものもよく見られる。

農作業に使うモテテと呼ばれるかご、飾用の動物モチーフの民芸品の編み方によく似ている。

ソフレ村のフェリクスさん(男性、79歳)によると、はじめはトルシージョの帽子を作っていたが、約50年前にそれ以外の民芸品を作ようになった。基本的には、誰に教えてもらったわけではなく、自分たちで考えだしてきたが、どうしても編み方がわからない場合や、質の改善等はパナマ商工省が実施してきたセミナーで講師に習ったり、参加者どうしで教えあったりして完成させてきた。

6-4.パナマ帽の販売、贈与

民芸品生産者は、できあがった商品を販売もしくは、贈与している。調査前は、外部の仲買人への販売のみを想像していたが、色々なパターンがみられた。

●外部の仲買人への販売

→村に買い付けに来る仲買人への販売

→ペノノメ市や観光地の仲買人や小売り商人に持ち込み販売

●村内の仲買人への販売

→村内の生産者兼仲買人への販売

→村内の生産者でない仲買人への販売

●村内の近隣住民や知人からの注文を受けての販売

※相場より安い値段で販売する。

サンペドロ村のラモーナさん(女性、年齢不明)は、筆者が訪問した時、村内の知人から注文を受けた、目の細かいフォーマル用の14段のパナマ帽を作っていて、ペノノメ市の民芸品店などでは、80ドル以上する品物を30ドルで販売すると言っていた。

●都会に住む家族、親せきへの贈与

※パナマ帽や民芸品などを都会に住む家族や親せきに贈与し、相手方は、次回訪問した時などに、もらったものの価値などとは関係なく、その時できる援助を金銭や物品などで返す。

エルコペ村ホーボ集落のエミリアーナさん(女性、84歳)は、帽子を販売せずに、首都にいる家族に送っている。筆者は、その家族が首都で販売し、その代金を受け取るのかと聞いたところ、代金はもらわないが、村に帰ってきた時に日用品を持ってきてくれたり、お金を援助してくれることもあると言っていた。

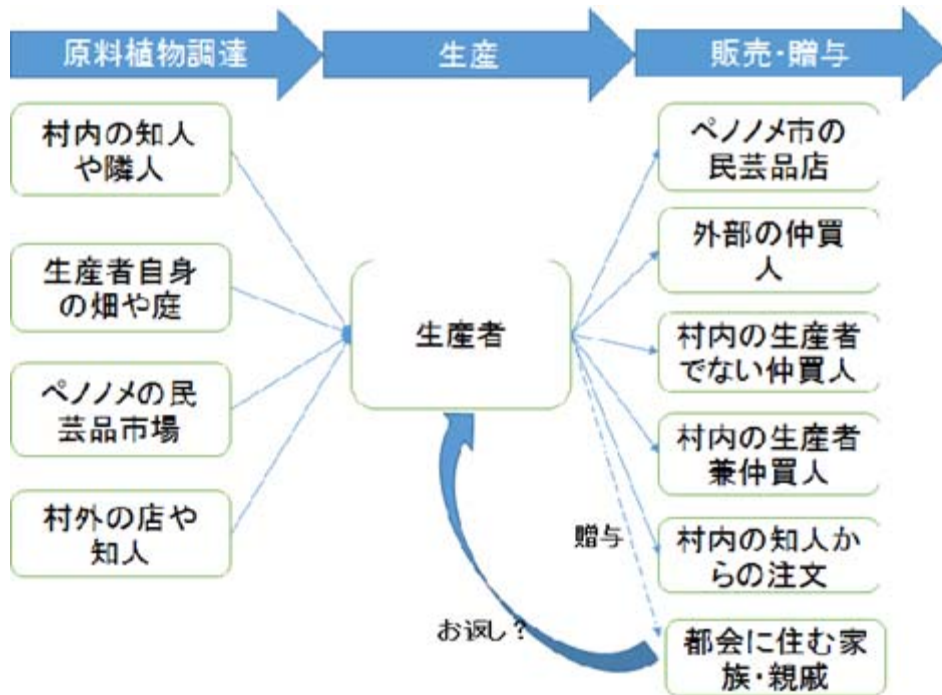


図 3.原料植物調達から販売・贈与までの流れ(筆者作成)

7.滞在中の生活について

食

パナマの主食は米であると言われており、調査地においても食されているが、都市部、パンアメリカンハイウェイ沿いの町に比べると米を食べる頻度はかなり少ない印象であった。

調査地域では、米を育てるのに適した土地があまりなく、キャッサバ、トウモロコシ、バナナ、プランティンバナナなどを栽培している農家が多く自給できるのでそれらの作物がよく食卓に並んでいた。全体的に塩気の強い味付けで、油で揚げている料理も多い。

あまり野菜は食べず、主食と肉のみの時も多かった。



(写真 4.米と豚肉の塩漬けを揚げたもの)



(写真 5.プランティンバナナを揚げたものとソーセージ)



(写真 6. キャッサバをゆでたものと魚の塩ゆで)



(写真 7. キャッサバを揚げたものと卵を揚げたもの)

交通

ペノノメ市のターミナルから、チバと呼ばれる小型のバスが各村に出ており、近くの村であれば一時間に2本程度あるが、片道3時間以上かかる村では一日1本のみのところもある。距離が長い路線ほど運賃も高く、住民は都市部に買い物に来るための運賃をねん出する必要がある。

住民はチバの運転手にいくらか礼を払って必要なものを買ってきてもらうこともある。

8.今後の調査について

今後は、今回のフィールドワークで得たデータを更に整理し、同時に文献レビューを行っていき、自身の問題意識をどういう方向で絞っていくのかが課題である。また、次回の調査では、さらにテーマを明確にし具体的な調査をしていく。

9.参考資料

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/panama/data.html>

http://www.dtac.jp/cs_america/panama/entry_336.php

<http://www.anam.gob.pa/>

<http://www.mici.gob.pa/base.php?hoja=homepage>